



卷之三

遊仙奇遇錦の里卷之八

江
戶

爲永春水作



五月九日午時

今をもむかせひとりゑくゆきとふト累
け方の丘のねぎふ風船をほせまの鳥遊やうりあら

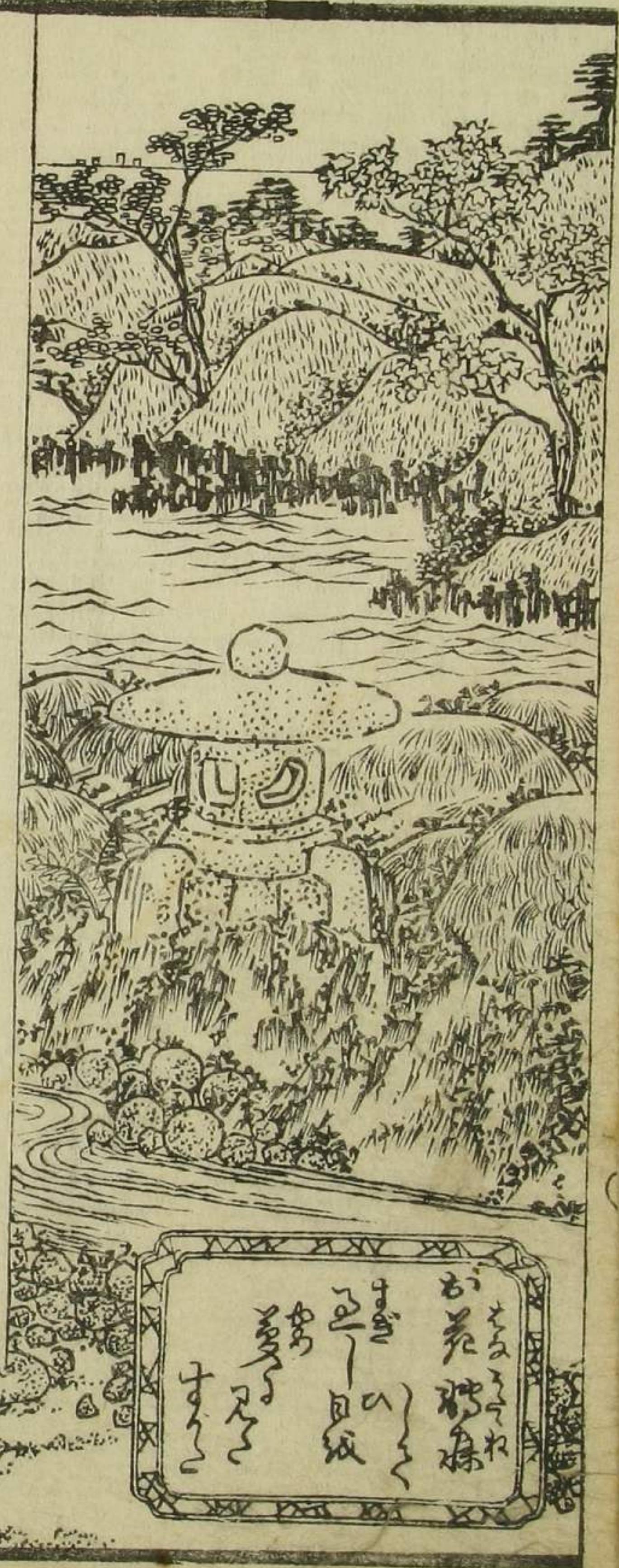
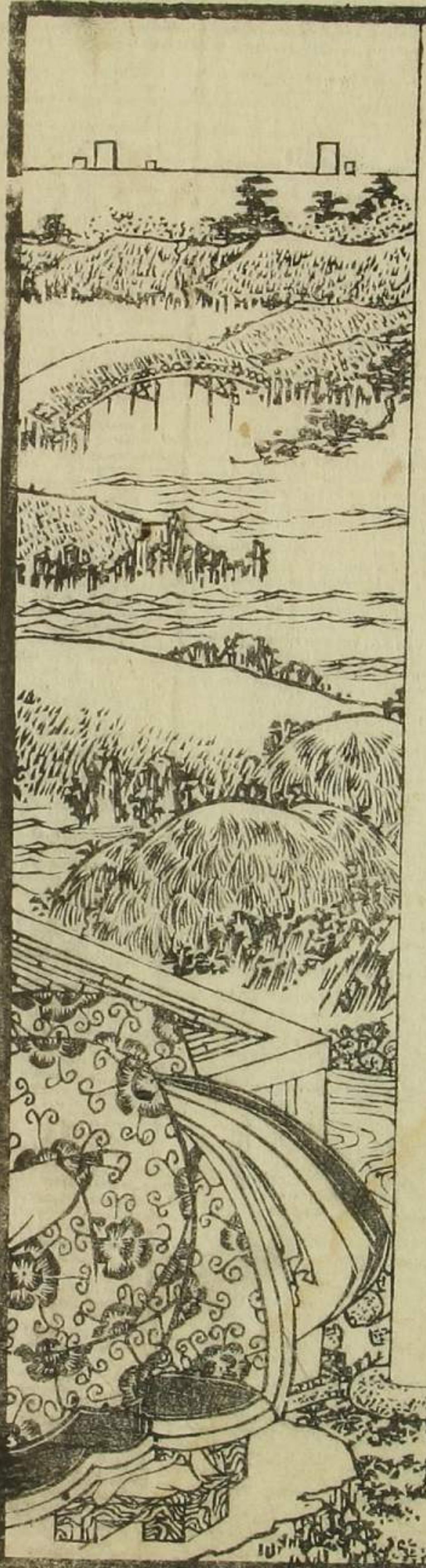
あめからうるみびあさくもあまやを
あそびにせれい私とも同どうす
は祭不内歎へぬによるぬがあわまくらの内歎
きどお魚と見るまでひつじひが方ひととんじ
もあきまきよ
居ても女のかづきはねふをあらぬあらぬと云ははる
のひきの上及びぬりとあまくらめて手すり中ひづらさく
じよく、うき
れまくまと手づくまくは不思議我うくまくは私の思ひ難
やうじよきをとうじよき不思議てまくはれ不思議
え
もあ
まく
えんぢう
まく
まく

理のちと又覺るを多方の心もむづか可也と云ふ
もれ らせ る
うそ是の事と本世の年もにけせらあまうそは
まうトきり雪の船は洞窟ゆうねんが後の葉
もさがる一途の兵色も死へよどとすよりむし所ゆ
まく いも 未だも
ほゆくさまとが女の脇とりひ雷の折りも高ぶるを解と
まく まく まく
らぬ邪元もよりとど後の脇もあきけはなにまく
いも まく まく
いまくまくとがのべ一回とえ怪しきふはひうちも
まく まく まく

てとらひだまみとあらみ まき まく まく
くま まく まく
ゆわる筋にちがへて化アホからが湯のせぬ被ふはるを
そ そ そ
まくまくと早雲うれ西あと乳輪もびキ おとキ
かのせじまく まく
かと一ヶ彼君三郎へたゆうねゑゆ因窟うらうを
つら まく まく
また高若の身小伏方ふ弱り虚病の翁と痴般ふ
まく まく まく
かと一ヶ彼君三郎どのの相玄あくく彼の温新え
かうへける身方じゆの西の春の下せれにがひ立ける



ハナニシノ中ノ四



ち義
まき
あ
す
ひ
日
紙

えりとおなうとあめうらじそふのまの
かうひとと
御傍に化人のあくびるとわすとせざり
モシまへむ

わらひのねでさきへまくへ「ラヤも見えうく見て是と子
わらひのねに五人で仕まふのとゆーうてはてあらう
モウモウに五人で仕まふのとゆーうてはてあらう
居ニヨトおさく身の若一げに病に苦ひてはてあらう
ハラタクわざとくせはくても是やどに苦のゆーうて
いまへ きく
ざくつよみの隠ともりとおりさゑとゆーうてはてあらう

きく あ
往あー「さけ松ふかずとまをくさむお御ふすましまう
青 わら う
十二書よ若一あきのヨ生を居てけくの松ひみ通ひ痛く
あ
はねより死のふと見惜と仕このごとくあへがんで本世の縁
あ
とあーとすまうるがおあへ行旅うことくわく今見て是と
きま とき
のへ行よりう候のむ草屋是取とむ草せぐ一カラビキ廢
て あ
こもみむれの木とむらぢらとせ彼をむの老僧のあ
あ
ゆアヒガヌムニシテ是とよりいだがじとよーとてはては

小
「ナヤ、きみは良婦とさんざ英男をも義のものと青さんとお名号
のくトイツにまこと身の有清承がタ夏モモシル故也
似事の縁が名ひも五月出来テバと若ら見てうれ清
雅あくありゆまるあくそのえどわま室すのまく
おけ角にまことほれの義とゆくとせし
お見の承清のすゞひ出せ共玄家ちへ青と身面
の善授るあり何とある只の義ふかくと判ひ

トアレの探貞へたうづも累々紀女の膝より述り
ゑもうく嫁かば妹ふ様の花の精がお花の名と
かり又うづも清雅ふゆひ一派の川をより清へ
お花の身に桜花の精舟をよびく極本の桜が倒さ
れ死死とまく清雅に手余させらるむかよび
楊柳丸さくの精もが清縁とおもてぬうつきうれ
いよ えんぜう や
て人間の人民にあらねむをもの絶句をばくせ

きふう
あり邊の不穎とあり
ササ
ゆく様さむのからあるゆふかのとくの
もふえんせんまよせんせん
もむと不論音宣ら公化境ふぢづて信ふる
もももももももももももももももももももも
もももももももももももももももももももも
もももももももももももももももももももも
もももももももももももももももももももも

きふう
あり邊の不穎とあり
ササ
ゆく様さむのからあるゆふかのとくの
もふえんせんまよせんせん
もむと不論音宣ら公化境ふぢづて信ふる
もももももももももももももももももももも
もももももももももももももももももももも
もももももももももももももももももももも
もももももももももももももももももももも

第十六回

左左左後竹にうつりふくわ隊清範の風流の妻家に

て左左左ども本精みさそれか花が絶縁の娘小迷ひ
その情念が墨さるやくふえくれ花の松木ふくはくと
け不似面とせび歩りくも落へおとが東吉屋ふじ
お朝が方あらへ主を奉の娘の不えども花へくも
りくねだよあちあちあちあちあちあちあちあち
花へ良き一もせぐ日と遙る風情とうそーうそ
あやかへ事き場所へ花へ一而も佳ゆ絶く

人間の事は
物心を経て
せり氣の生き活死と云ふを覺え
けられがお教へが定わらく日あふる有りぬれを
おもひらきも有り、ちゆうじゆくかく
ゆくふどうある
れ酒肴の肴と食ふ一とき中ゆも生きの生れたら
是のものも組み立て
「お爺さんせんべいよ」拂引つゝ
も景をさへ子
「やあ」接ひびくと
「さうして往後と云ふ恨とつゝとすふ風情の

すとりよせんぢやアういヨソ」とは後へかおがぬる
ねつり こうしゆ 了 よ だり
ちやアういゝ根角 竹のむ雑さんざせを張 う
もひ ひう まくら らい え
鰐よそくのくま おをひくふせきへけつてまくゆ

其かの
様よう新しんさんざんざんざんととあらわす「もく」景けい風ふうの姫ひめが入はい
る。此この後あと、夜よの事ことで、出でけ粉こと金きんだこ
りの一人ひとりもあつた。子こ一いち年ねん、豪ごう切きて之を「事こと」
の用もちを六ろく人じん連つづくわづくが子こ姓せいさうふさうふおせうせんが
主ぬしを取とり入はいたと、それからまづ、もとその松まつを
移いす。今いままことに止とどまつて表ひょうふる。此この事ことを
ひり、そそうする。人ひとが、もろもろと食くて居ゐかるかよく、着きると、神村かみむらハキウ



一人のまゝあつて経方さへはそばと云ひて食を
あくまでおきるも爲り法方おけ粉やを尋めて
あらうがゆの石でもあら爲賣されまつりあもモウ難
いものあひてはざくくゆつてあらん人が
比とどく其しが
多めにあらえられ可矣がアリテ
多くあらえられ一ひとがせんと一遠不^ち
後と云ふ私やモウへあがため可矣か和合せば

金子が京へうりこゝる後中が空く度うちまくさう
まくうちまくきあくゆくまくも事ふ用とおもほんとね
て寝てえどヨアあくもきともちあらえ」とい之「そく
あれくあくちかくひびトツアセ隣のわらわ
ト年ぐちの娘が来一きよがえりあくもかくひのき
鶴あもチット走りせもおはす今まモウく完全に着
まくじゆくとゆくものまく「やあよのさんうさを

今日へ今まごへお出であるとアヤモトアヤモトアヤモト
行わき本どせりお絵のちやアヨリ「アヤモト
あらわ
おとれを承さんざな子母の事アヤモト母人アヤモト
の事アヤモトアヤモトアヤモトアヤモトアヤモト
にと一も私が通じ先と仕合、事は私ふむと
なく妻とは私ふおりアヤモトアヤモトアヤモト
やああまの事アヤモト母の事アヤモトアヤモトアヤモト
アヤモトアヤモトアヤモトアヤモトアヤモトアヤモト

もくおの母さんの方アヤモトアヤモトアヤモト
母人アヤモトアヤモトアヤモトアヤモトアヤモト
おみがおむねじゆもあると誰もう可先かるど
アヤモトアヤモトアヤモトアヤモトアヤモト
をも風久まき自もが赤みでも春もれアヤモト
あれアヤモト母人アヤモトアヤモトアヤモト
未アヤモトアヤモトアヤモトアヤモトアヤモト

さんもあがへながくおせがころわくとまくをうそ
りそ
か立ぐろけ
「わや、社終で仕合をして「マサ
れま
ねまよゆくあるのゆるがつらきのゆゑヨ
「主、まよと
ちそ
もか
あい
きをまわ
さき
ひくは二ゆゑをえきのふもゆゑ（ゆゆく）仕合
きもと
あくも
こも
まい
まんちきまく
れふく彼家のふ室まんにゆくが二首を乞ふ
りそ
まよ
まく
る
まく

「おれのわやかが生むる立のおりまことに
お会いされどもけんや彼女にかゝり出でると
おぢきをわざのあふるゝ競争の所すがあの
くわゑぬるは寝てけども所すがのうるか
竹林へも自然がゆく男が笑トに立とひが
えりきりんごう「ア秋へも庭はらを放
めあるが極力とへて世話とまちが寄り日耶」
ともひよるヨヲあ

きのむぎ「あつてめぐわのむらう大物の人び
ゑふへきのサ「おやむふむ教ひへきく清貧え
きは人み付くむか」ア私も「チヤマアけ

